

相談支援係
072-941-3365

ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～



【「ぶっぶ～！！」「ここ通れるかな～？」】

～『やってみたい！』が学びの芽～

1歳児の様子

10月9日(木)1歳児の遊んでいる様子を見てきました。子どもたちは親しんでいる体操の音楽が聞こえてくると、保育者の真似をして、「どんどん」「ぐるぐる」などの声を出しながら体操したり、保育者が歌う季節の歌を聞いたり口ずさんだりしていました。保育室前のホールには、柔らかい素材で作られたハードルや、マットの山、透明のトンネル、フラフープやコンビカーなどの、安全面に考慮された遊び環境が整えられていました。運動会を経験し、「体を動かすことが楽しい！」と思い始めている子どもたちが「やってみたくなる」環境であると思いました。



数人の子どもたちがホールでコンビカーに乗って、気になる場所へ出かけていきました。そんな中、A児は、マットの山をよじ登り降りしたり、フラフープを見つけ中に入って、「ぶっぶー！！」とホールを1周走ったりしていました。再び、コンビカーに乗ると、ハードルを置いている隙間へそのまま向かっていきました。はじめは、勢いよく走りながら入ったり出たりしていました。何度も繰り返した後、今度はゆっくりと慎重に前後に動かし、ハンドルを細かに切りながらコンビカーを動かしました。ハードルの幅ギリギリにコンビカーを寄せられるか、（ここ通れるかな～?!）とA児なりに考えているように思いました。A児が足の親指に力を入れて、ゆっくりゆっくりコンビカーを動かそうとしていた姿や、前から通るだけでなく、バックしながら通れるかな、と試している姿がとても印象的でした。

保育者は、子どもに背を向けずに、常に全体が見える位置から、子どもの様子を見渡せるように意識しています。そして、子どもたちと遊びを楽しみながら、子どもの『こうしたい』という思いを受け取り、環境を再構成したり、応答的にかかわったりします。時には、意図的に発達を促せる、その時期に合っ

た玩具も取り入れます。コンビカーがその1つです。乗り物を自分で動かせる楽しさ、スピード感を味わえることに加えて、コンビカーのハンドル操作では、手足の協調性を養い、足で蹴ることで足腰の筋力の発達を促します。今回のエピソードでは、保育者が意図していない遊び方の中で、A児が自ら何度も試している姿から、学びの芽を見取ることができました。柔らかい素材で作られたハードルは、跨いだり、ジャンプしたりして遊ぶとイメージした教材でしたが、子どもが違う遊び方をしている姿を、保育者も何を楽しんでいる？何を思っている？とあたたく見守ったことで生まれた学びの芽だったと思いました。

ハードルの幅ギリギリに寄せる中で、コンビカーや自分の体の大きさを確認しているA児が、また新たな「隙間」を見つけて、（ここ通れるかな～?!）と試すことを楽しめるような環境は何がよいかなと考える、今後の遊び環境の展開が楽しみになりました。子どものワクワク感を楽しむために、保育者もワクワク感をもって環境を整え、かかわっていく。また「やってみたくなる」遊び環境の中で、子どもたちが主体的に色々なことを知り・驚き・感じる経験を、積み重ねていくことが大切だと思いました。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は10月から11月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）11月号

- ・特集1 エージェンシーを読み解く
- ・特集2 不快感上のコントロール

「そだちの科学」（日本評論社）No.45 2025.10.October

- ・特集 子どものうまくいかないところ

「道徳教育」（明治図書）11月号

- ・特集 問題解決的な学習、結局“何”がカギ？

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）11月号

- ・特集 子どもたちの「伝えたい」気持ち、「伝わる」表現力を高める
～「個別最適な学び」「協働的な学び」から表現を考える～

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）11月号

- ・特集Ⅰ 小学校におけるウェルビーイングの実現
- ・特集Ⅱ [算数] 単元を見通して統合的・発展的に考え、資質・能力を育む

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）11月号

- ・特集 [高等学校] 各教科を交えて語り合う②～主体的・対話的で深い学び～

巻頭の「提言」で『「いい学習課題」ができるまで』、と題して愛知教育大学の正木友則准教授が寄稿されています。

1 よい学習課題を考えるための三つの提案

一つめ、「学習課題」を①教師による「発問・しかけ」に近いもの、②子どもからの「問いづくり」に近いもの、③ ②と③の折衷てきなものと分類したうえで、個々では①から③を踏まえ、「問い（課題）」という形式で話が進みます。

二つめ、「よい学習課題は、一つに収斂されるものではない」とのことです。つまり授業を構成する「子ども」「教材」「教師」等の状況によっては同じ結果が得られるものではないので、ここを見誤ると「教師の思考と、授業の硬直化や形骸化」を招きかねません。

三つめ、「よい学習課題は、子どもたちの学習意欲を喚起する」とのことです。教師が題を考える上で「子どもたちがハッと目線が上向く」ようなものでなくてはなりません。

2 ゆさぶられる問い（課題）とそのポイント

ゆさぶられる問い（課題）の三要素は限定・比較・否定で、これらを生かした「選択・判断」型のポイントは次の三点です。

第一は「教材の特性」を踏まえることです。「問い（課題）」が「教材の特性」とつながりがなければ「学習の深化／高次化」はできないとのこと。

第二は「学習に参加しやすい問い（課題）ある」ということです。まず、判断の結果ではなく、判断する根拠と理由づけを重視しなくてはなりません。また、極力「なぜ？」型の問い（課題）を避けなくてはならない、とされています。その問い（課題）が子どもの心（内面）から湧き出るものと一致しないことがあるからです。

第三は「過程を重視する」ということです。授業は学習集団の対話によって進められますが、子どもたちが向上的に変容するのは、対話の結果ではなく「対話の過程」によって変容するとのこと。よい問い（課題）は「一つの答えに収束される」ものではない方がよいようです。

3 教師のターンと子どもたちのターン

問い（課題）は、基本的に子どもたちの言葉を受けて「教師のターン」で出されますが、「子どもたちのターン」で、その問い（課題）を考える必然性や文脈（ストーリー）の「たがやし」が必要であるとされています。

4 問い（課題）そもそも何のため？

それは「子どもたちが考え、その言葉を「聴く」ためです。そのためには「子どもたちが対話を活性化させ、「考え・試し・悩み・語る」時間をつくり、適切に価値づけし助言し励ます必要があります。また、子どもたちの言葉（声）を聴くためには子どもたちの自己活動（教材・他者・自己との対話）を徹底的に促し、見守り励ますマインドが必要であるとされています。

これらのことから、子どもの側からの教材研究が必要であり、子どもたちの学習（声や姿）も教師の授業実践も結果像ではなく「過程」像でなくてはならないという事がわかります。

さて、この記事の執筆者である 正木 友則 准教授が本センターの事業である「授業と講演」（11月25日）のため八尾市立高安小中学校（前期過程）に来ていただいて、ご講演をしていただきます。テーマは「国語科における授業へのアプローチ～低・中・高に合わせた～」です。この研修の感想等は12月号の所報に掲載する予定です。

※この研修の申込期限は11月11日です。

（葭仲）